

増分タイプのマデ文について

小西 正人

抄録:本稿は小野(2007)で提示された「彼は死ぬまでたばこを吸った」という文のふたつの解釈(「彼はたばこを吸ったのでそれが原因で死んだ」および「彼は死ぬまでたばこを吸い続けた」)をとりあげてマデ節を分析した小西(2018)をさらに発展させ、その中でも複雑な性質をもつ増分タイプのマデ節について詳細な分析を行った。はじめに従属副詞節を形成するマデ節を「時間タイプ」と「程度タイプ」に分け、「程度タイプ」をさらに「極限マデ節」と「増分マデ節」に分類した。そして時間タイプでは時間軸に、程度タイプでは程度スケールにマデ節が適用(単一化)されていることを示し、さらに増分タイプでは構造保持束縛により主節事象と状態変件事象が増分関係にあることを示した。また増分タイプのマデ文について「(状態変件事象における)程度スケールの種類」および「主節事象の種類」からそれぞれの特徴を示したのち、増分マデ節で表される事象は実際に生起しなければならないという特徴を指摘し、その特徴が増分関係から導かれる変化の漸進性とも関連して増分マデ文の特徴を形成していることを示した。

キーワード:マデ節, 時間タイプ, 程度タイプ, 増分タイプ, 程度スケール

1. はじめに

英語の結果構文を扱った小野(2007)に、「厳密には結果構文とは言えないが」という但し書きがついた以下の例文(日本語)と2つの解釈が挙げられている(小野2007:91-92)。

(1) 彼は死ぬまでたばこを吸った。

「彼はたばこを吸ったのでそれが原因で死んだ」(CAUSE 解釈)

「彼は死ぬまでたばこを吸い続けた」(PATH 解釈)

小野(2007:85-86)は事象構造としての達成事象に CAUSE タイプと PATH タイプの2種類があるとし、以下のような説明を与えたうえで例(1)の2つの解釈をそれぞれのタイプの達成事象と結びつけた。

(2) a CAUSE タイプの達成事象

- 達成事象の基本的な事象構造

- 使役構造「原因事象 (P (e₁)) CAUSE 結果事象 (Q (e₂))」をもつ

John broke the vase. → 「P (e₁, john, vase) CAUSE Q (e₂, vase)」

- 事象の到達点 (culmination) は動詞の語彙的な意味に内在

b PATH タイプの達成事象

- John ran to the store.

2つの事象 (run (e₁, john) と go-to (e₂, john, store)) が同時展開的に進行

- 着点句が動詞の事象をアスペクト限定 (delimit) して完結性 (telicity) を決定

しかしこの小野 (2007) の説明と (1) を比較してみると、「PATH 解釈として挙げられている解釈における「2つの事象」が何を指すのか明らかではない (もしその2つが「(彼が) たばこを吸う」事象と「(彼が) 死ぬ」事象であれば、この2つの事象は同時進行していない)」、「マデ節でそのような解釈となる理由が明らかでない」、「小野 (2007) では因果関係と同時 (展開) 関係が対立的なものとして示されているが、本当にそのような関係にあるのか明らかではない」、また「ここでは2つの解釈が示されるのみで、これ以上の詳しい分析がなされていない」などの問題がある。

小野 (2007) の挙げたマデ節の2つのタイプについて、小西 (2018) ではそれぞれのタイプの特徴および意味関係を再検討し、それぞれ「程度タイプのマデ節」と「時間タイプのマデ節」とした。そしてさらに前者を「主節が非継続事象を表すマデ節」と「主節が継続事象を表すマデ節」の2種類に分け、分析を行った。本稿ではそのうち程度タイプのマデ節の后者 (ただし分類基準については再検討を行う) について、さらに詳しい分析を行う。

2. 時間タイプのマデ節, および2種の程度タイプのマデ節

2.1 本稿で扱うマデ節について

本稿は、小西 (2018) で扱ったマデ節、すなわち「動詞ル形¹⁾ + まで」という形で連用修飾節を形成して主節事象を修飾するマデ節を扱う。したがって「家に帰るまでが遠足だ」「彼と張り合うまでになった」のように名詞節となるもの (「そうなったら徹底的に争うまで (だ)」などのように述語となるものを含む)、「盗んでまで手に入れたかった」という「～てまで」の形 (および関連する「人のものを盗みまでして…」「盗む (こと) までした」という形) については扱わない。また「～までの」となり連体修飾節となる形については、連体修飾でなければ「ほど／くらい」などにより程度を明示する必要がある場合があること、また「～までに」という形式も連体修飾では「～までの」となること (cf. 小西 2018: 46) から、本稿では扱わない。

さらに、マデ節と主節でそれぞれ表される2つの事態間の関係を表すというよりは、主節がなんらかの「距離」をはかる計量的な述語をもつマデ文があり、これについても本稿では考察の対象外とする。

- (3) a 演奏会が始まるまであと5分だ／5分を切った。
- b 穴に落ちるまであと3mだ。
- c 「よし、買ってやろう！」となるまでもうひと息だ。

2.2 マデ節の種類とそれぞれの性質

本節ではマデ節の種類およびそれぞれの性質について述べる²⁾ (cf. 小西 2018)。

はじめに小野 (2007) が PATH タイプとしたものについて考える。このタイプはいわゆる使役構造を含まず、そのため事象の終結点は動詞の語彙的な意味に内在するのではなく、例 (1) では「たばこを吸う」事象が「死ぬ」という事象が生起するときまで継続した、という意味を表すと考えられるため、小西 (2018) ではこのタイプのマデ節を「時間タイプのマデ節」とした。このタイプの文は、マデ節がとる事象によって「時間上の一点を示す」ことにより、主節で表される (継続的) 事態が「その特定の時点を到達点とする範囲³⁾として限定される」という性質をもつ。

- (4) a 子規は死ぬまで俳句を作った。 (小野 2007: 92)
- b 友だちが来るまで本を読んだ。

c 夜が明けるまでつづける。

それに対し小野 (2007) が CAUSE タイプとしたものについては「程度スケール⁴⁾上の一点を示し、その特定の点を到達範囲とするマデ節」であると分析し、「程度タイプのマデ節⁵⁾」とした。このタイプの文は、マデ節がとる事象によって「程度スケール上の一点を示す」ことにより、主節で表される事態が「その特定の程度点を到達点とする範囲として限定される」という性質をもつ。

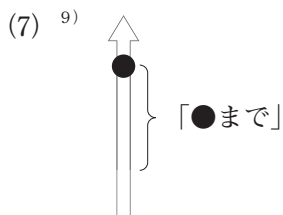
また程度のマデ節にも2種類があり、小西 (2018) では主節事象の継続性という基準によって分類したが、そのとき注18 (小西 2018: 47) でも示唆したとおり、両者の違いはそれぞれのマデ節が程度スケールおよび関連事象とどのように関係するかという違いによるものである。そこで本稿では主節事象の継続性ではなく、程度スケールおよび関連事象とマデ節との関係によって分類を行う。

そのひとつはいわゆる「極限のとりたて⁶⁾」を表すマデ節 (例5) で、程度の到達範囲のみをマデ節によって特定し、その到達点を極限值として主節の表す事態を修飾するというものである。もうひとつは小野 (2007) の CAUSE 解釈にも通じるマデ節 (例6) で、主節によって表される事象の継続に随って漸次的に状態変化 (事象) も進行し、マデ節で示した到達点にいたるというもので、両事象は増分関係 (incremental relation)⁷⁾ にある。本稿では、前者の程度タイプのマデ節を「極限マデ節」、後者の程度タイプのマデ節を「増分マデ節」とよぶ。本稿で主に扱うのはこの「増分マデ節」である。

- (5) a 気絶するまで (強く) 殴らなくても…
 b 庭の植木が吹き飛んでしまうまで (強く) 風が吹いた。
- (6) a 顔が腫れるまで (何度も) 殴った。
 b 泳げるようになるまで練習する。

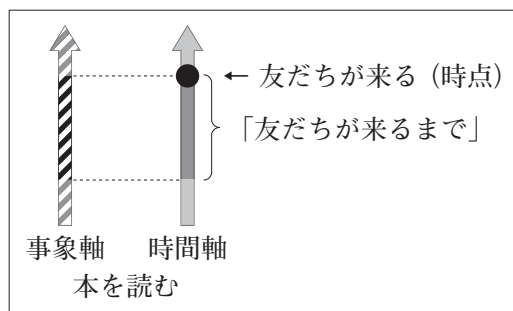
ここで到達範囲を表すマデがそれぞれどのような「到達範囲」を表すかということについて、図を用いて模式的に示しながら⁸⁾、それぞれのタイプの特徴を示す。

まずマデは、名詞句につく場合も含め、方向をもつ1次元の軸に対してマデによって示される特定の点を到達点とする範囲を表す。



時間タイプのマデ節の場合、時間軸にマデが適用 (単一化) され、以下のような形となる。

- (8) 友だちが来るまで本を読む。

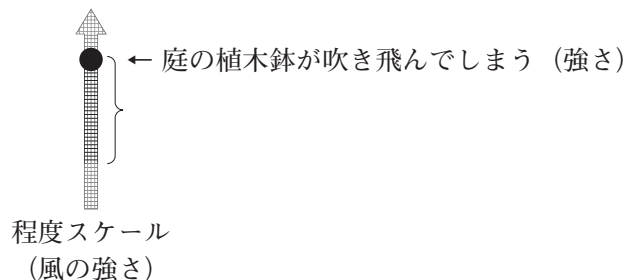


この場合、マデ節で示された時点を到達範囲として、主節で表された継続的な事態（ここでは「本を読む」事象）が時間的に限界づけられる。そのためマデ節がとる事象は、基本的には特定の時点を表すことのできる瞬間事象である¹⁰⁾。また小西（2018）でも述べたとおり、主節が表す事態は状態でもよく、また特定の時点は「名詞句+マデ」というマデ句でも表すことができ、「～ときまで」（あるいは「～までの間」）という形でおおよそ言いかえることもできる。

- (9) a この薬を入れるまで白かった／赤くなかった。
 b 父親が帰宅するまで／3時まで遊んだ。
 c 友達が帰る（とき）まで泣いていた。

これに対し、程度タイプのマデ節のひとつである「極限マデ節」の場合、マデ節は単一化すべき「方向をもつ1次元軸」として程度スケールを選び、程度スケール上の特定の点（値）を到達範囲の到達点としてその程度を表す。例（10）では、主節事態に関連する程度スケール（この場合は「風の強さ」）を設定し、その上の一点（この場合は「庭の植木鉢が吹き飛んでしまう」強さ）を特定の程度を表す点としてとりたて、主節事態を修飾している。このときマデ節はその点を「到達範囲の終点＝程度上の極限の値」としてとりだすため、文全体ではいわゆる「極限のとりたて」を表すこととなる。

- (10) 庭の植木鉢が吹き飛んでしまうまで（強く）風が吹いた。



このとき、主節の事象は動作事象でも変化事象でもよく、またいわゆる事象表示そのものには程度スケールはあらわれず、マデ節で示された特定の程度値は事象に関連する程度（この場合は「風の強さ」）を示すものとしてのみ事象意味合成に加わる。

- (11) a 気絶するまで（強く）殴らなくても… (= 5a)
 b 彼はその事件で熱烈な支持者にもそっぽを向かれるまで（一気に）信用を失った。

ただしこの極限タイプは実際は解釈が少し難しい¹¹⁾ ようで、程度スケールを明示する修飾表現と共起したり、「～くらいまで」などの形であらわれたりする必要があり、単独で現れた場合には文語的になることもある。

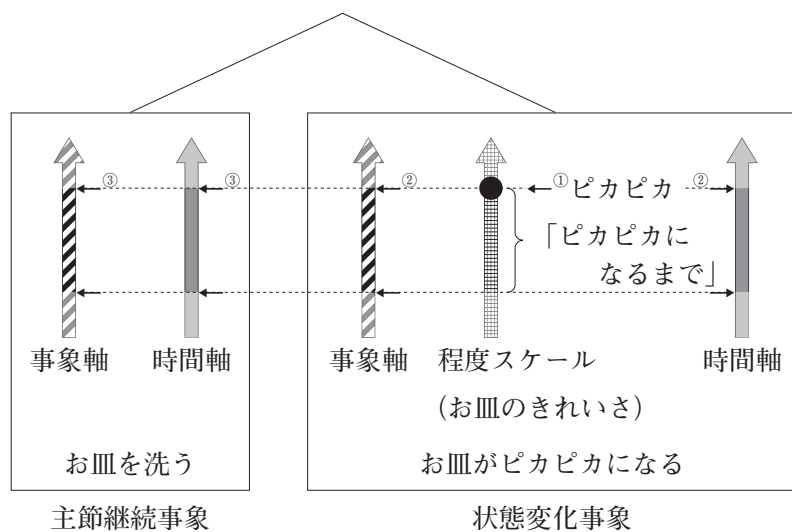
- (12) ? 「好きな人いるの～？」って言われちゃうまで顔に出てたみたいなの。

それに対し、本稿で扱う「増分マデ節」の特徴は、①まず状態変化事象の程度スケールにマデ節が作用（単一化）し、②構造保持束縛¹²⁾によりその状態変化事象の事象軸および時間軸、③さらに主節の事象軸および時間軸を限定し、その結果、状態変化事象が主節事象と増分関係をもつというものである。増分関係とは、例えば消費事象「ピザを食べる」の場合、「食べる」事象が進展するに随っ

て対象であるピザが小さくなっていく（この場合ピザをすべて食べれば事象は終了する）、という関係である。このとき、状態変件事象の程度スケールは主節の動詞が語彙的にもつもの（あるいはそれに近いもの）が使用されることもあれば、文脈などによった事象解釈をもとに新たに創出されたりすることもある（詳細は3.2で扱う）。また主節事象は継続事象となるよう、いわゆる瞬間動詞が用いられる場合は複数化などの解釈によって適宜調整される（詳細は3.3で扱う）。

- (13) a お皿がピカピカになるまで／手の皮が剥けてしまうまで洗った。
 b 指先が真っ赤になるまでじっと押しつづけた。
 c 満腹になるまで／おなかが痛くなるまで／冷蔵庫が空っぽになるまで食べた。
 d 泳げるようになるまで練習する。

(14) お皿がピカピカになるまで洗う。



(図中の①②③は前頁本文中①②③に対応)

2.3 それぞれのタイプの違いと境界について

第3節で本稿の主なテーマである増分マデ節についてみるが、実際の例では時間タイプのマデ節や極限マデ節との区別が難しいものも少なくない。そこで本節では、増分マデ節の分析を行う前に、他のマデ節との違いおよびその境界について述べる。

2.3.1 時間タイプのマデ節と増分マデ節の違いと境界

時間タイプのマデ節と増分マデ節は、いずれも連用修飾節ではあるが、前者は事態を「外から」時間的に限界づけるのに対し、後者は事象を（到達点における状態を「結果状態」として）「内から」程度的に限界づけるという性質をもつため、基本的には異なるものである。しかし「#昨日は午後3時まで気温が25℃まで上がった」というような複数の限界づけが（複数事象の生起などの「解釈」をしなければ）不可能である¹³⁾のと同様、マデ節の場合も両者は共起できず、また増分マデ節の場合、構造保持束縛により程度スケール上の終点と主節継続事象の終点、および時間軸上の終点の三者が関連づけられ、程度スケール上の特定の点に到達した時点が結果的に事象全体の終点となることから、時間タイプとも増分タイプともとれる文がみられる。この場合、「主節事象の継続に随って同時に進行する（特定のスケールをもった）状態変件事象」を想定しやすいかどうかがいわゆる「判定基

準]となる(想定しやすければ増分マデ節として解釈されやすい)。

(15) 細かい字がはっきりと見えるようになるまで(メガネの) レンズを交換する。

はっきりと見えてくるまで段階的に交換する場合 (増分マデ節)

でたらしめな順序で交換している場合 (時間マデ節)

(16) a 警察が来るまで辛抱した。 (時間マデ節)

b 血管が切れそうになるまで辛抱した。 (増分マデ節)

またマデ節に「時間の経過」を表す表現が含まれる場合(例17)や、時間の経過によって状態変化が進行するのが通常の場合(例18)、また動作時間の長さにより状態変化が生じる場合(例19)なども「判定」は難しい。

(17) a 君が代は、細石が巖となって、苔が生すまで続く／栄える。

b 義務教育を終え、就職し、ひとり立ちするまで育て(あげ)る。

(18) a 赤ちゃんが眠るまで踊った。 (時間マデ)

b 赤ちゃんが眠るまで歌った。

c 気分が晴れるまで会わなかった。

(19) a 電源ランプが点灯するまで長押ししてください。

b 闇が自然に感じられるまで／目が真っ赤になるまで目を閉じた。

c 顔が真っ赤になるまで息を止めた。

2.3.2 極限マデ節と増分マデ節の違いと境界

いっぽう、この二者(極限マデ節と増分マデ節)は程度スケール上の特定の点を到達点とするという点と同じであるため、「両事象が増分関係をもっているか(もっていれば増分マデ節)¹⁴⁾」「[まで]で極限值を表しているか(表していれば極限マデ節)」という点が「判別方法」として挙げられる。しかし後述するように、増分マデ節の多くが程度スケール上の上方の点(程度が大きい点)を示すことが多く、増分関係をもっているとしてもそれが極限マデ節でないと一概に判断することは難しい¹⁵⁾。

(20) a もう昼か夜か分からなくなるまで勉強した。

b 空腹で倒れそうになるまで働いた。

c 血反吐を吐くまで練習した。

ここで名詞句につく格助詞およびとりたて助詞のマデについてみてみたい。日本語記述文法研究会(2009b: 102)では「[まで]の前に来る名詞や文脈によっては、格助詞「まで」にも極限的な意味が感じられる場合がある」として、「旅行好きの田中さんは地球の裏側まで旅をした」「最近忙しくて夜中の2時3時まで仕事をしている」という例文を挙げている¹⁶⁾。前節で扱った時間タイプのマデ節と異なり、極限マデ節と増分マデ節はいずれも程度スケールにおける限界づけを行なっているため、増分マデ節が極限マデ節としても解釈される(あるいは極限的な意味が感じられる)ということは、名詞句につく格助詞／とりたて助詞のマデ同様ありうることである。

したがって本稿では、極限的な意味が感じられるマデ節であっても、主節の表す事象と状態変化事象が増分関係にある場合、これを増分マデ節の例として扱う。

また、日本語記述文法研究会編(2009b: 98)には極限を表すとりたて助詞の「まで」について、「意志や勧誘、行為要求を表す文には用いにくい」として「[?結婚式にはよく知らない人まで招待しよう。

(意志)「? 結婚式にはよく知らない人まで招待しなさい。(行為要求)」という例が挙げられているが、極限マデ節でもやはりそのような文では用いにくいようである¹⁷⁾。次の(21)の例は「何度も殴って気絶させる」という増分解釈のみが自然で、「気絶するほど強く(一度だけ)殴る」という極限マデ節としての解釈は非常に難しい。

(21) a 気絶するまで殴ってやろう。

b 気絶するまで殴れ!

また現実(にまだ)生起していない事象についても¹⁷⁾「植木鉢が飛ぶまで強く風が吹いたら…」というような仮定を表す場合は極限解釈が難しく、「[ここを思い切り強く叩いてください]と言うと画面にひびが入るまで叩く人がいますが…」というマデ節においても増分解釈(すなわち「何度も叩いてその結果ひびが入る」という解釈)が自然である¹⁸⁾。

3. 増分マデ文について

3.1 増分マデ文の基本的性質

増分マデ文は、2.2でも述べたとおり「主節によって表される事象の継続に随って漸次的に状態変化(事象)も進行し、マデ節で示した到達点にいたるといふもので、両事象は増分関係にある」という性質をもつ文である。格助詞の「まで」については、日本語記述文法研究会編(2009a: 63)に「移動の動詞とともに用いられる場合には、「まで」は全行程で継続する動きを表す」として「子どもたちが学校から家まで歌を歌いながら帰った」という例が挙げられており、増分マデ文においても同様にマデ節で示される到達範囲の到達点に(状態変件事象が)達するまで主節事象が継続していることが自然に説明できる。

ここで影山(1993, 1996)における「たくさん」の分析をみてみよう。影山(1993: 54-55, 1996: 72-74)は分量の副詞として用いられる「たくさん」について、他動詞および非対格動詞と共に用いられた「たくさん」は内項の数量を規定している(たくさん飲んだ=飲んだ量がたくさん、たくさん産まれた=産まれた子供がたくさん)のに対し、非能格動詞と共に用いられた「たくさん」(たくさん遊んだ、たくさん蹴った)は「行為の量を表す」(影山1993: 54)、「継続活動そのものの量を表している」(影山1996: 73)、「継続動作すなわちACTを修飾する副詞として働いている」(影山1996: 74)と述べている¹⁹⁾。本稿でも、増分マデ文において増分関係にある二つの事象のうち、主節が表す継続事象については、単に状態が持続しているだけではなく、影山(1993, 1996)で述べられている「行為の量」や「継続活動そのものの量」が時間の経過とともに増大する過程と考える²⁰⁾。そして増分マデ文においては、主節で表される事象の「継続活動の量」が増大するに伴い、マデ節がとる事象を程度スケール上の一点としてもつ状態変件事象の「変化量」も増大する、という関係をもつとする。この「継続活動の量の増大」は、主節で表される事象の性質によりさまざまな形で現れる(これについては3.3で詳しくみる)。

3.2 状態変件事象がもつ程度スケールの種類

本節では増分マデ文における状態変件事象がもつ程度スケールについてみる。

主節動詞自体が語彙的に程度スケールをもつ、いわゆる状態変化動詞である場合、増分マデ文においてもそのスケール(あるいはそれに近いスケール)を用いることができる²¹⁾。これは、動詞だけ

では抽象的なそれぞれの程度スケールの値に、具体的な事象の生起をいわば「目盛り」として充てたものであると考えられる。

- (22) a 少し焦げ目がつくまでハンバーグを焼く。
b 完全に中の様子が見えるまで澄んだ。
c 元の形がわからなくなるまで溶けた。
d ひとりで 100m 先の人形をとって来られるまで調教した²²⁾。
e 音だけで誰だかわかるまで極めた。

これらの動詞はマデ節以外でも「かなり／だいぶ／十分 (に)」などの程度副詞を用いて²³⁾ 程度スケールを修飾することができる。

また、必ずしも状態変化を引き起こすわけではないが、通常は状態変化と強い関連をもつ動詞の場合も同じようなふるまいを示す²⁴⁾。

- (23) a お皿がピカピカになるまで洗う。
b お腹がいっぱいになるまでごはんを食べた。
c 泳げるようになるまで練習した。

これらとは異なり、増分マデ文においてまったく新しい程度スケールが創出されることも少なくない。特に主節動詞が語彙的に程度スケールをもたない動詞である場合、マデ節は修飾（単一化）する先を確保するために程度スケール（および関連する状態変化事象）を創出し、両事象を増分関係によって結びつける。

- (24) a 出入禁止になるまで迷惑をかけつづけた。
b 彼は死ぬまでたばこを吸った。 (小野 2007: 91)
c 顔が腫れるまで（何度も）殴った。

ただしこの場合、「主節で表される事象の継続活動が進行／増大するに随って状態変化も進行する」という解釈がある程度容易でなければ、増分マデ節としての解釈は難しくなる。

3.3 主節動詞および主節の表す事象について

本節では増分マデ文における主節動詞の種類、および主節が表す事象の種類から増分マデ文を分析する。

はじめに、主節動詞が漸進的状态変化解釈の可能な状態変化動詞である場合をみる。3.2でも述べたとおり、この場合は動詞が語彙的にもつスケール（あるいはそれに類似のスケール）を利用することができる²⁵⁾。

- (25) a このバーベルを一人で持てるようになるまで鍛える。
b 鮮やかな紺になるまで染める。

また状態変化動詞であっても、後述する非状態変化動詞と同様に、新しく程度スケールを創出し、そのスケール上での状態変化事象を主節事象と増分関係で結びつけることができる（ただし先述のとおり、主節継続事象と状態変化事象との間の予想可能な関係が必要である）。

- (26) a 手の皮が剥けるまで穴を掘った。
b 冷蔵庫がからっぽになるまで食べた。

主節動詞がいわゆる（単純）活動動詞の場合、語彙的に程度スケール（および関連する状態変化事

象)をもたないため、マデ節を増分マデ節として解釈するためには程度スケールを含む状態変件事象を創出しなければならない。この場合、マデ節が示す程度値に達するまで状態変件事象および主節事象は継続される。

- (27) a もう立てなくなるまで踊った。
 b 本の綴じ紐が三度も切れるまで(何度も)読んだ。
 c 誰かが倒れるまでやるぞ!

主節動詞がいわゆる瞬間動詞や限界動詞であれば、主節全体として継続的事象を表す必要があるため、参与者や事象の複数化が行われることが多い。この複数化は明示的に行われることもあれば、対応する言語表現を伴わずに解釈規則によって行われることもある。これらの場合、「継続活動量の増大」は参与者や事象の数、および継続時間量の増大として解釈される。

- (28) a 顔が腫れるまで(何度も)殴った。
 b 出入り禁止になるまで(重ねて)警告を受けた。

主節で表される事象が維持事象である場合、「特定の状態の維持」を表す事象である(すなわち出来事の展開=はじめ～なか～おわり=がない)という意味的制約から、「継続活動量の増大」はそのまま「継続時間量の増大」として解釈されることになる。ただし単に維持を続けるというだけでは増分マデ文を構成することはできず、積極的に維持を続けた結果として何らかの状態変化が起こるという事象関係をもたなければならない(例文 29d)²⁶⁾。また同様に主節動詞が「はたらきかけの弱い」動詞である場合も、状態変化を引き起こす原因と解釈することが難しく、増分マデ文を構成することはできない(例文 30)。

- (29) a 指が真っ赤になるまで押し(つづけ)た。
 b 腰が痛くなるまで屈む。
 c 疲れが完全にとれるまで(深く)眠る。
 d #順番が回ってくるまでそこに座った。(時間マデ)
 (30) a 全員が着席するまでクラシック音楽を流す。(時間マデ)
 b 柵からお餅が落ちてくるまで待つ。(時間マデ)

またこれに関連して、小西(2018: 40)では主節に否定文がくると程度タイプの解釈が難しいことを指摘し、その理由を「程度タイプの解釈をもつためには積極的に状態変化を推進させるなんらかの原因事象が主節に必要となるにもかかわらず、否定文は「状態」を表すため、その条件に適合しないから」であるとした²⁷⁾。

- (31) a 体を壊すまで医者に行かなかった。
 (×「(頑なに)医者に行かないことが原因で健康を悪化させ、体を壊してしまった」)
 b 病気になってしまうまで無視をした。(時間/程度解釈)
 c 病気になってしまうまで話しかけなかった。(時間解釈のみ)

3.4 増分マデ文の性質

ここではこれまで述べた以外の増分マデ文における特徴を挙げ、分析を行う。

小西(2018)では程度の到達範囲を表す「まで」について、「[～くらいまで]の形のみが可能となる場合もある」(小西 2018: 47)ことを指摘した。

(32) a 英字がプリントされている上着を着るくらいまでならだいじょうぶです。

b 張り手で相手を圧倒するくらいまでならまだ許せる。

本稿ではさらに、「～くらいまで」を用いた場合、マデ節で表されている事象が実際に生起していなくてもかまわないのに対し、増分マデ節を用いた場合は必ずその事象が実際に生起している（あるいはそう期待されている）必要があることを示す²⁸⁾。

(33) a (中の) プラスチックが溶けるまで温度を上げた。

b (中の) プラスチックが溶けるくらいまで温度を上げた。

c^{??} プラスチックが溶けるまで一気に温度を上げた。

d プラスチックが溶けるくらいまで一気に温度を上げた。

(34) a 前が見えるようになるまで髪を切った。

b 前が見えるようになるくらいまで髪を切った。

c 前が見えるようになるまで {*一気に／^{OK} 少しずつ} 髪を切った。

d 前が見えるようになるくらいまで一気に髪を切った。

例 (33a, b) はそれほど意味や容認度の違いが感じられないが、状態変件事象「温度を上げる」に対して「一気に」という修飾表現を加えた場合、その差が明らかとなる。「～くらいまで」という形をもつ (33d) は意味や容認度は (33b) とほとんど変わらないが、動詞ル形に直接「まで」がつく (33c) は容認度が一気に下がる。これは瞬間的な事象であることを表す「一気に」という修飾表現により、主節継続事象および状態変件事象の漸進的な増大を表す増分マデ節としての解釈が非常に難しくなったためである。同様に、(34) の「髪を切る」というのも（「髪を伸ばす」場合に比べて）漸進的、あるいは瞬間的のどちらの状態変化の解釈も可能であるが、増分マデ節を用いた (34a) の場合、(34b) とは異なり、「髪を少しずつ切っていく」という意味が含意される (cf. 34c, d)。

また増分マデ節を用いた (33a) の場合、実際にプラスチックが溶けるという事象が生起する必要があるが、「くらい」を間にはさんだ (33b) の場合、熱さの程度を指定できさえすれば「実際に中にプラスチックが入っていてそれが溶ける」という事象が生起しなくともよい。このことはマデ節／句の内部に仮定的な条件を入れてみると、その容認度の差として現れてくることから示すことができる。すなわちマデ節で表される事象の生起を条件とする増分マデ節の中には、仮定的な条件を含ませることはできないのである。

(35) a *中にプラスチックを入れれば溶けてしまうまで温度を上げた。

b 中にプラスチックを入れれば溶けてしまうくらいまで温度を上げた。

これは「可能動詞+まで」を用いて増分マデ文を作ることが難しいという特徴とも関連している。例 (36) の場合、「人が通ることができる」幅でドアを開けたということであり、実際にそこを人が通ったわけではないため、増分マデ節を用いた (36a) は容認できない例となる²⁹⁾。

(36) a *人が通れるまでドアを開けた／ドアが開いた。

b 人が通れるくらいまでドアを開けた／ドアが開いた。

ここで興味深いのは次の対比である。

(37) a[?]*小学生がひとりで持てるまで、カバンを軽くした。

b 小学生がひとりで持てるくらいまで、カバンを軽くした。

c この子がひとりで持てるまで、カバンを軽くした。

例 (37) において「(一般的な) 小学生」を主語とした増分マデ節 (37a) は不可能である (あるいは非常に難しい) のに対し、「(具体的な) この子」を主語とした「可能動詞ル形+まで」という形が増分マデ節として解釈される場合、マデ節事象の事実性 (実際にこの子がカバンを持てた³⁰⁾) と状態変化事象の漸進性 (ひとりで持てるかどうか何度も試し、持てない場合はさらに軽量化した) が含意される。(37a) の容認度が低いのは、文脈なしでこの含意をもたせてこの文を解釈するのが難しいためである。

また同じく事象を表すものであっても事象名詞句を用いたマデ句では増分マデ文を構成することはできない (cf. 小西 2018: 39) が、これも同じ理由が関わっている (すなわち事象名詞句によって表される事象は個別具体的であるというよりは抽象的であるため、そのままでは「実際に事象が生じた」という具体性を示すことが難しい) と考えることができる。

(38) a 病気になるまで／発病するまではたらいだ。 (時間／程度解釈)

b 発病まではたらいだ。 (時間解釈のみ)

(39) a {授業終了まで／授業が終了するまで} おしっこをがまんした。 (時間タイプ)

b {*膀胱破裂まで／膀胱が破裂するまで} おしっこをがまんした。 (増分タイプ)

増分マデ文の他の特徴として挙げることができるのは、(極限マデ節ではなく) 増分マデ節の場合であってもマデ節によって示される到達点が程度スケール上の終点に近い (あるいはかなり大きい値である) ことが多いということである (cf. 2.3.2)。これはおそらく上述の「マデ節で表される事象が実際に生起する必要がある」という特徴のほかに、増分マデ文が多くの場合、動詞に語彙的に含まれている程度スケールではなく、新たな程度スケール (およびそれを含む状態変化事象) が文脈等で補充される必要があるという特徴と関連している。すなわち、ここで補充される程度スケールは新たに創出されるものであるため不安定で、実際に生起した事象が程度スケールの上方の値を示す場合はそれまで実際に生じた事象に基づいてそのスケールを構成しやすいのに対し、それが程度スケールの下方の値を示す場合は「さらに程度が進んだ場合はどのような事象が生起するのか」ということが予測しにくく、スケールを構成しにくいためであると考えられる。

したがって、創出される程度スケールがある程度予測可能なものである場合 (40a) や、程度スケールの「その上の値」が分からなくてもよいものである場合 (40b)、マデ節によって示される程度値がそれほど高いものでなくとも増分マデ文としての解釈は可能となる。

(40) a 私は空腹を軽く満たすまで口にしたが、あいつは歩けなくなるまで食べた。

b 少なくとも／とりあえずリンゴに見えるまで (は) 赤く塗ってください。

また他の特徴として、増分マデ節に意志的な主体による行為事象がくることは難しい場合があるようだ³¹⁾ (cf. 小西 2018)。

(41) a 彼が新聞を読むまで脅した。

b 彼が新聞を読むようになるまで脅した。

これは意志的行為事象が程度スケール上の値を示すことが難しいということに起因している。すなわち増分マデ文においては主節事象と状態変化事象は増分関係にあるため、主節事象が進行していくに随って状態変化事象も「順当に」進行しなければならない。しかし意志的行為者が関与する行為事象の場合、事象生起の可能性は行為者の意志による部分が大きくなり、ある程度順当で正確な程度スケール上の点を構成することが難しくなるためであると考えられる。

4. まとめ

本稿では小野（2007）で提示された「彼は死ぬまでたばこを吸った」という文のふたつの解釈をとりあげてマデ節を分析した小西（2018）をさらに発展させ、その中でも複雑な性質をもつ増分タイプのマデ節について詳細な分析を行った。はじめに従属副詞節を形成するマデ節を「時間タイプ」と「程度タイプ」に分け、「程度タイプ」をさらに「極限マデ節」と「増分マデ節」に分類した。そして時間タイプでは時間軸に、程度タイプでは程度スケールにマデ節が適用（単一化）されていることを示し、さらに増分タイプでは構造保持束縛により主節事象と状態変化事象が増分関係にあることを示した。また増分タイプのマデ文について「(状態変化事象における)程度スケールの種類」および「主節事象の種類」からそれぞれの特徴を示したのち、増分マデ節で表される事象は実際に生起しなければならないという特徴を指摘し、その特徴が増分関係から導かれる変化の漸進性とも関連して増分マデ文の特徴を形成していることを示した。

注

- 1) 山口・秋本編（2001）の「まで」の項（pp.751-752）には「活用語の連体形に付く」として「昼は日の暮るるまで（麻豆）」（万葉・488）あるいは「大殿油まゐりて、夜ふくるまでよませ給ひける」（枕・清涼殿の丑寅のすみの）などが挙げられている。また現代語においても動詞以外では「完膚なきまでにたたきのめす」「異常なまでの執念」などの連体形に連なるものとして用いられている。また本稿では動詞語幹に受身・使役等の助動詞のついた形も対象とする。
- 2) 中古のマデについての研究に小柳（1999）がある。小柳（1999）は中古のマデについて主に源氏物語を資料として用法の整理を行い、マデの上接語句と用法の間に一定の対応がみられることを主張した。そして上接部が句である場合の用例は源氏物語に274例あるが、そのうちの234例が〈極度〉（或る事態を並列する諸事態の限度のものとして示し、それによって別の事態の程度が極端に高いことを表す）用法に偏っていることを示した（その他は〈極限〉1例、〈持続〉38例、特殊例1例）。このうち〈持続〉（或る時点を時間的な拡がりの限界点として示し、それによって時間量を表す）用法は上接語との対応からも本稿の「時間タイプのマデ節」に対応すると考えられるが、小柳（1999）ではその他の例をほとんど〈極度〉用法と分析しており、本稿の主題となる増分マデについては言及されていない。本稿で明らかにするように、現代日本語においては、極限マデ節と増分マデ節は同じ「程度タイプ」であるために共通する性質をもつものの、異なった意味と性質をもつため、小柳（1999）の分析をそのまま適用することはできない。

また、中村・岡見・阪倉編（1999）の「まで」の項（p.418）には、「①行為・作用の及ぶ、時間的・空間的な到達点・到達線を示す。その時点まで。その所まで。その間ずっと」（節を伴う場合、本稿の時間マデに相当）、「③事柄の及ぶ範囲を、許容される、あるいは可能な限界の物事を挙げて、到達点として示す。それ以内のものはすべて含まれる」（本稿の極限までに相当、ただしここでは節をとるマデの例は挙げられていない）という意味のほかに、本稿と関連するものとして「②作用・状況の量的・質的な面について、その程度の到達度（どの程度にまでなっているか）を示す」という意味を挙げ、「大宮の内にも外（と）にも光る麻泥（まで）降れる白雪見れど飽かぬかも」〔万葉・3926〕、「ありぬやと心みがてら逢ひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき」〔古今・雑体〕、「月日に添へて、この君のうつくしうゆゝしきまで生ひまさり給ふに」〔源氏・横

- 笛] という例が挙げられている。しかしこれらの例はそれぞれ積もった白雪・恋しさ・成長具合の程度を示すのみで（しかも第2例は主節述語が形容詞である）、本稿の主題である増分マデ文（小野（2007）の CAUSE タイプの解釈をもつもので、主節によって表される事象の継続に随って漸次的に状態変化（事象）も進行し、マデ節で示した到達点にいたるという意味を表す文）ではなく、注5でとりあげた日本語記述文法研究会編（2009b）の「程度をあらわす「まで」」に近いが、同じものであると考えられる（またこれらの「程度用法」は、現代日本語では「までに」という形のほうが比較的自然であると思われる点でも本稿の対象となる増分マデ節とは異なり、程度スケールのみに関連するところなどむしろ極限マデ節に近い）。
- 3) 影山・由本（1997: 141）では到達範囲を「経路上の範囲を限定する表現」とし、「に」が最終的な着点を表すのに対し、「まで」については移動が及ぶ範囲を限定する・「その先」を続けられる（「3合目までバスで行った」）・着点指向の「着く、到着する」などの動詞が「まで」と共起しない（「*ハイジャックされた飛行機がピョンヤンまで着陸した」）などの特徴から、「まで」は到達範囲を表すとの分析を行っている。
 - 4) Kennedy and McNally（2005: 351）では、形容詞のもつスケールは3つの重要なパラメタ（a set of degrees, a dimension（「速度／温度／量」などの種類）、an ordering relation）をもち、それぞれは語彙項目で特定されると述べている。本稿の状態変化動詞がもつ程度スケールも同様に考える。
 - 5) 日本語記述文法研究会編（2009b: 102）に「程度をあらわす「まで」」として「この山頂から見る日の出は本当に美しく、神々しいまでだ」「その子の目が異様なまでに輝いて見えた」という例を挙げ、「「まで」には程度を表す形式名詞としての用法がある。「神々しい」「異様だ」といった通常とは異なる様子を表す形容詞について、程度のはなはだしさを表す」と説明されているが、本稿でとりあげた「動詞ル形+まで」という形をもつマデ節については言及されていない。
 - 6) 「極限のとりたて」を表す助詞のマデについて、日本語記述文法研究会編（2009b: 87, 96-100）に「極限のとりたてとは、文中のある要素をとりたて、同類のものの中で極端な例として示すとともに、他のものは当然であるという意味を暗示することである」「「まで」は、文中の要素を、その事態と結びつく序列のもっとも遠いところにある極限として示し、その事態が意外なものであることを表す」として「餓死寸前になって雑草まで食べた」という例を挙げているが、節のとりたてについては引用節（「～とまで」）と時間節（「～ときまで」）が挙げられているのみで、多くないとされている。本稿では連用修飾節を形成する「動詞ル形+まで」にもこの意味を表すものがあるとして分析を行う。
 - 7) Rothstein（2004: 108）では、増分関係について以下のように定義しており、本稿でもこれにしたがう。

Incremental relations

Let e_1 be an activity, e_2 be a BECOME event, and $C(e_2)$ be an incremental chain defined on e_2 .

$INCR(e_1, e_2, C(e_2))$ (e_1 is incrementally related to e_2 with respect to the chain $C(e_2)$) iff:

there is a contextually available one-one function μ from $C(e_2)$ onto $PART(e_1)$ (the set of parts of e_1) such that:

for every $e \in C(e_2): \tau(e) = \tau(\mu(e))$.

上の定義で用いられている incremental chain $C(e)$ の定義は以下のとおりである (Rothstein 2004: 107).

Incremental chain:

Let e be a BECOME event.

An incremental chain $C(e)$ is a set of parts of e such that:

1. the smallest event in $C(e)$ is the initial bound of e
2. for every e_1, e_2 in $C(e)$ $e_1 \sqsubseteq e_2$ or $e_2 \sqsubseteq e_1$
3. $e \in C(e)$

- 8) 模式的なものではなく理論に基づいた表示としてはたとえば岩本 (2008) における事象投射表示などがあるが (「まで」については岩本 2008: 124 など), 紙幅の都合などの理由からここではとりあげない。
- 9) 多くの場合, 時間軸は左右 (横軸) にとることが多いが, 語彙概念構造や生成語彙論の事象構造の表記法に即した形で複合事象を並置して示せること (例えば (14)), また岩本 (2008) の提唱する事象投射構造の表記にも通じることなどから, 本稿では時間軸を上下 (縦軸) にとる。矢印については, 性質の違いを表すため事象軸・程度スケール・時間軸でそれぞれ異なった図柄を用いた。
- 10) ただし「朝起きて (から) 友だちが来るまで本を読んだ」のように全体として時間幅をもつ (複合) 事象となる場合もある。
- 11) このタイプのマデ節が難しい理由のひとつに, (着点ではなく) 到達範囲を表すマデが用いられている積極的な理由がなければならないということがあり得ると思われる。
また時間マデ節や増分マデ節の場合とは異なり, 程度スケール (のみ) にマデ節が単一化されることにより機械的に「極限的意味」をもつことになるわけではなく, 「それを極限值として解釈する」というプロセスが必要となることも関連していると思われる。実際, 注5でとりあげた日本語記述文法研究会編 (2009b) の例 (「本当に美しく, 神々しいまでだ」「異様なまでに輝いて見えた」) や, 注2でとりあげた中村・岡見・阪倉編 (1999) の例 (「光るまで降れる白雪」「たはぶれにくきまでぞ恋しき」「ゆゝしきまで生ひまさり給ふ」) は, それぞれ程度を修飾しているが, 極限というよりはむしろその程度 (が大きいこと) に驚き (あるいはそれに類する感情) を込めているように感じられる。「までに」との関連も含めて, 今後の課題としたい。
- 12) Jackendoff (1996) は, 事態軸・空間軸・時間軸が同型的に対応する (たとえば移動事象において, 有限の1次元経路の終点にいるという状態が1次元事態軸 (= 事態軸) の限界点となり, また時間軸 (1次元) とも対応してその時点が終点となる) 関係を「構造保持束縛 (structure preserving binding) 関係」とよび, それをもとに事象を表示する構造保持理論を提唱した。
- 13) ただし「気温が上がる」を持続事象と解釈し, 「午後3時まで気温 25℃の状態が続いた」という事態を表す文であると解釈すれば容認可能である。
- 14) したがって主節で表される事態が継続事象でない場合, 極限マデ節解釈のみが可能となる (cf. 例 11)。
- 15) ただし「こころゆくまで楽しんだ」のように, 程度が大きくても極限のとりたてを表さない場合もある。

- 16) ただし名詞句の場合「太郎まで京都まで来た」という共起は可能である。
- 17) これは「文中の要素を、その事態と結びつく序列のもっとも遠いところにある極限として示し、その事態が意外なものであることを示す」（日本語記述文法研究会編 2009b: 96, 傍点筆者）という「(極限を表すとりたての) まで」の意味とあわないため、つまり「意外なもの」であるはずの要素を前もって意志したり行為要求したりすることが不自然であることによると考えられる（したがって「結婚式にはよく知らない人まできちんと招待しろって言われた」などの文であれば自然に用いることができる）。
- 18) これも同様に「意外なもの」として前もってとりたてることが不自然なためであると考えることができる。
- 19) また同様に英語の a lot に対しても「副詞としての a lot は継続活動としての ACT（ないし ACT の繰り返し）の分量を表現するものと見なすことができる」（影山 1996: 74）と述べている。
- 20) 3.3 でみるが、単なる維持事象では増分マデ文を構成することができない。
- 21) ただし二値的なスケールや漸進的変化解釈が難しい閉鎖スケールをもつ場合を除く。
- 22) ただしマデ節を用いて「～した結果、～するように／できるようにになった」という意味を表す成長／育成系の動詞（「育つ／育てる」「上達する」「成長する」など）は、マデ節で表される事態が実際に生じた事象でなくてもよく、マデ節で意志動詞を用いることができ（「自分一人で着替えができるまで育った」）、また「までに」と言いかえられるものも多いなど、本稿 3.4 で示すような他の増分マデ節と異なる特徴をもつものが多いため、慎重な分析が必要である。
- 23) また動詞によっては「昨夜は池の水が凍るまで／0℃まで気温が下がった」のように数値的にその値を表すことができるものもある。
- 24) これに関して例えば中谷（2007: 291-292）は、Pustejovsky（1998）のクオリア構造に関する議論を動詞意味論に敷衍し、通常は対象を綺麗にするというはっきりとした意図のもとに行われる行為を表す wash と clean を比較し、その目標が達成されることが含意される clean においてはそれを外延演算子と定義された形式役割（FORMAL ROLE）に、またその目標が達成されることを必ずしも含意しない wash においてはそれを内包演算子と定義された目的役割（TELIC ROLE）に充て、両者の区別を試みている。
- 25) しかし状態変化や増分性と関連の深い移動動詞や消費動詞などの場合、動詞が語彙的にもつスケールを利用した増分マデ文は難しいようである。これは、それぞれのもつスケールが程度スケールではない（移動動詞の場合は経路スケール、消費動詞の場合は増分対象（incremental theme）スケール）ため、事象を用いて値を特定することが難しい（あるいは不可能である）ためであると考えることができる（cf. 「その飛行機は頂上が見えるまで上昇した」「ピザが半分になるまで食べた」）。
- 26) 2.3.1 の例（17-19）も参照。
- 27) したがって明らかな因果関係が認められ、かつ否定文ではあるが何らかの事象が進行していると解釈できる場合、増分タイプの解釈が可能となることがある（「電車が止まるまで雪がやまなかった」（＝電車が止まるまで雪が降り続いた））。またマデ節を含む全体が否定されている場合（「眠くなるまで（は）勉強しなかった」＝「眠くなるまで勉強する」ということはなかった）は、この限りでない。

- 28) この特徴は、同じ程度タイプである極限マデ節にもあてはまり、むしろ極限マデ節のほうが制限が強いようである。ただしいずれも誇張表現を除く。
- 29) ただし注 22 でとりあげた成長／育成関係の動詞など一部の動詞では、可能動詞や「～できるまで」という形で程度タイプのマデ節が可能となる場合がある。
- 30) 可能動詞文はしばしば（事象ではなく）状態を表すが、ここでは「(カバンの軽量化の末、ついにその子がひとりでカバンを持ったということから)『その子がカバンを持てる』という状態が(実際に)生じた」ことを表していると考えることができる。
- 31) 他動詞であっても意志的な行為事象を表さない場合（「お腹をこわすまで食べる」「拳を痛めるまで殴った」）は解釈しやすい。また意志的行為事象であってもまったく不可能というわけではなく、たとえば「そのクレーマーは（最終的に）支店長が出てくるまで大騒ぎした」という文の場合、「(最終的には)支店長が出てくるほどまでの大騒ぎをした」という増分マデ解釈はある程度可能である。

文献

- 岩本 遠億. 2008. 『事象アスペクト論』 東京：開拓社.
- Jackendoff, Ray. 1996. The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language & Linguistic Theory* 14. 305-354.
- 影山 太郎. 1993. 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.
- 影山 太郎. 1996. 『動詞意味論』 東京：くろしお出版.
- 影山 太郎・由本 陽子. 1997. 『語形成と概念構造』 東京：研究社.
- Kennedy, Christopher and Louise McNally. 2005. Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 81(2). 345-381.
- 小西 正人. 2018. 「二種のマデ節について — 時間タイプと程度タイプ —」. 『北海道文教大学論集』 第 19 号. 37-49.
- 小柳 智一. 1999. 「中古のマデ — 第一種副助詞 —」. 『国語学』 199 集. 42-54.
- 中谷 健一郎. 2007. 「文処理ストラテジーという視点から見た結果構文の類型論」. 小野尚之編『結果構文研究の新視点』 東京：ひつじ書房. 289-317.
- 中村 幸彦・岡見 正雄・阪倉 篤義編. 1999. 『角川古語大辞典 第五巻』 東京：角川書店.
- 日本語記述文法研究会編. 2009a. 『現代日本語文法 2』 東京：くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編. 2009b. 『現代日本語文法 5』 東京：くろしお出版.
- 小野 尚之. 2007. 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」. 小野尚之編『結果構文研究の新視点』 東京：ひつじ書房. 68-101.
- Pustejovsky, James. 1998. The semantics of lexical underspecification. *Folia Linguistica* Vol. 32. 323-347.
- Rothstein, Susan. 2004. *Structuring events: a study in the semantics of lexical aspect*. Blackwell Publishing.
- 山口 明穂・秋本 守英編. 2001. 『日本語文法大辞典』 東京：明治書院.

Incremental Type of *made*-clauses in Modern Japanese

KONISHI Masato

Abstract: In Modern Japanese, sentence (1) has two meanings depending on the type of interpretation of the *made*-clauses (Ono 2007).

(1) Kare wa sinu-made tabako-o sut-ta.
 he TOP die *-made* cigarette-ACC smoke-PST

interpretation 1: He died because of too much smoking.

interpretation 2: He continued to smoke until he died.

Based on Konishi (2018), I first defined “time-type” *made*-clauses, which roughly mean *until* in English (interpretation 2), and “degree-type,” which roughly mean *to the extent*. Then, I further classified the latter into two types; the “extreme-type,” which picks up the extreme example (as *even* in English, e. g. *As the meeting was so important, even the principal attended.*), and the “incremental-type,” which approximately corresponds with interpretation 1 above and is the topic of this paper. In the incremental-type, the event described in the *made*-clause delimits the change-of-state event by pointing the value on the degree scale defined by the change-of-state event, and then the change-of-state event and the event described in the main clause are related through the incremental relation. Next I illustrated how these three types of *made*-clauses are unified: with time axis (time-type), only with degree scale (extreme-type), and both by “structure preserving binding” (incremental-type, cf. Jackendoff 1996). After a brief look at the characters and the borders of these three types, I focused on the incremental type and examined the characteristic properties of incremental *made*-sentences from the incremental scales and of the main verbs in the main clauses respectively. Furthermore, I pointed out that the events which are described in the incremental *made*-clause to indicate the degree on the scale must actually take place (except hyperbolic expressions), and explained distributional conditions of this type based on this property.

Keywords: *made*-clause, degree-type, degree scale, incremental relation, structure preserving binding